

大津皇子の詩と歌：詩賦の興り、大津より始めり

著者	胡 志昂
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	13
ページ	333-348
発行年	2013-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000305/



大津皇子の詩と歌

— 詩賦の興り、大津より始めり —

胡 志 昂

一、はじめに

日本上代文学を語るのに大津皇子を避けては通れない。皇子は初期懷風藻詩最大の詩人であつたばかりでなく、初期万葉集歌の代表的な歌人の一人でもあつたからである。

皇子大津に関わる記載は日本書紀に多い。その主なものを拾うと、壬申の乱（六七二）に際して皇子大津一行鈴鹿関を固めたのが初見。翌天武二年の天皇即位記に正妃、鸕野皇女（後の持統天皇）の立皇后に関連して「先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。大來皇女と大津皇子とを生れませり」とある。次いで天武八年五月に吉野宮で天皇と皇后及び草壁皇子・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子の六皇子が皇位継承を廻る盟約を行った。そして十年二月に淨御原律令編纂に伴い、草壁皇子が皇太子に立てられ、二年後の十二年二月に大津皇子「始めて朝政を聽しめす」ことを記す。これは後に聖武天皇が皇太子として初めて朝廷政治に預る時に用いられた表現と同じことが注目を引く¹。

ところが、朱鳥元年（六八六）九月九日、天武天皇が崩御、皇

後の鸕野讚良皇女が朝政を総攬する体制を敷くと、十月二日皇子大津の謀反が発覚し皇子が逮捕され、同時に逮捕されたものは壹伎連博徳、巨勢朝臣多益須、新羅沙門行心など三十余人に及ぶ。翌日、皇子大津は詔語田の自宅で死を賜る。時に二十四歳。妃の山邊皇女が髪を振り乱し裸足で奔り赴きて殉死した。この光景を見聞したものはみな啜り泣いたという。持統紀冒頭は天皇即位記に続く最初の記事がこの大津皇子謀反事件であつた。紀は続いて皇子の薨伝を綴っている。

皇子大津、天淳中原瀛真人天皇第三子也。容止墻岸、音辞俊朗。爲天命開別天皇所愛。及長辨有才学。尤愛文筆。詩賦之興、自大津始也。

皇子大津は、天淳中原瀛真人天皇の第三子なり。容止墻く岸しくして、音辞俊れ朗なり。天命開別天皇の爲に愛まれたてまつりたまふ。長に及びて辨しくして才学有す。尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興、大津より始めり。

大津皇子は、容姿が立派で体格が逞しく、音声も言葉遣いも優れて爽やかであり、天智天皇に愛されていた。成長すると弁知に

秀で才学に富み、最も文筆を好んだ。詩賦の興りは大津皇子に始まるという。持統紀には皇太子・草壁皇子や太政大臣・高市皇子が薨去の時も全く薨伝を記していない。このことから大津皇子の扱いは如何に格別であつたことが知られる。

右に掲げた正史の記載に見られる大津皇子の才学と経歴、及びその優れた学識才能に比例する余りにも痛ましい悲劇が皇子の作品制作に多大な影を落としたことはいうまでもない。が、それよりも皇子の命運の落差の大きさと記載の紙背に滲む哀惜の情が後人に大きな想像・創造の空間を遺すこととなった。実際、大津皇子の作品に臨終の詩と歌が懷風藻と万葉集にそれぞれ見えるが、作品の表現、成立等々に絡んで後人仮託の説があり、それが皇子の作品全般に及んでいる観がある⁴²⁾。

日本漢文学史にとって更に重大なのは「詩賦の興り大津皇子より始れり」という記載である。日本漢詩文の勃興は周知の如く近江朝においてであり、懷風藻の巻頭に大友皇子の詩が現存している。皇子大友が大津より十六歳も年上でしかも学識文才ともに優れるのに、なぜ大津が最初に詩賦を作ったのかという問題は早くから提起されたが⁴³⁾、果してどうなのだろうか？本稿は史料に見える皇子大津関連記事のテクストを基本に据え、主に懷風藻に収められた皇子の詩・伝に些か考察を加え、上記の問題をめぐって一私見を出したい。そしてその結果、皇子の詩歌の解説に資するところがあれば望外の喜びに思う。

二、古今集序の言質

日本漢詩文が近江朝において勃興したことは周知の通りである。

(一)

だとすれば、持統紀に見る詩賦が大津皇子に始まるとの記事が史実に合わないのではないかという疑問が生じる。なぜなら壬申の乱で近江朝廷が敗れたとき、大津皇子はまだ十歳だったからである。筆者も別稿でこれを天武朝漢詩文の制作状況を反映するものと考えたが⁴⁴⁾、果たして紀に取り立てて記されたこの一文はどういう事情を反映しているのか。近江朝廷で制作された美辞麗藻が百篇に止まらなかったからこそ、尚更この記事の重みを改めて考える必要があるであろう。

日本書紀は完成した翌年の養老五（七二一）年から宮中で博士が公卿王族に講義するという書紀講筵が開かれ、古今集成立までに計五回行われた。

養老五年（七二一）博士は太安万侶。

弘仁四年（八二三）博士は多人長。

承和六年（八三九）博士は菅野高平（滋野貞主とも）。

元慶二年（八七八）博士は善淵愛成。

延喜四年（九〇四）博士は藤原春海。

その間、詩賦の興り大津より始まるという認識がますます浸透したと見られる。最初の勅撰和歌集・古今集眞名序（漢文序）に作者の紀淑望が漢詩と和歌の盛衰消長を語ってこう記している。

自大津皇子之初作詩賦、詞人才子慕風繼塵。移彼漢家之字、

化我日域之俗。民業一改、和歌漸衰。

大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人・才子、風を慕ひ塵に繼ぎ、かの漢家の字を移して、我が日域の俗を化す。民業一たび改りて、和歌漸く衰へぬ。

ここに大津皇子が初めて詩賦を作ったと明言したばかりでなく、

それに人々が慕い従って真似、漢詩文隆盛をもたらしたといい、そこに和歌の衰微した理由があったと主張しているのである。実際、漢詩文の勃興した近江朝に遡ってみれば、和歌の創作が大変に盛んで先代より勝るとも衰えることはなかった。漢詩と和歌は消長関係ではなく、常に映発関係にあり、万葉集に多くの詩人兼歌人が存在し、その首唱者がまさに大津皇子にほかならない。さらにいえば漢詩の「化」すなわち刺激を受けて和歌の手法や表現領域が大きく広がり、栄えることも衰えることがなかったことは、万葉集に収められた数々の優秀な和歌と作者を見れば明らかである。⁴⁵ 紀淑望が嘆く和歌の衰微は恐らく平安初期に勅撰和歌集よりも先に凌雲集・文華秀麗集・経国集という三つの勅撰漢詩集が相次いで編集されたことを念頭に置いての発言と思われるが、たとえその時代でも和歌の制作が決して少なくはなく、漢詩の刺激を受けて次の飛躍を胎動せしめる時期だと考えたほうが真実に近いであろう。新撰万葉集や句題和歌がその辺りの事情を物語っている。

それとはともかく、古今集序は詩歌創作の起源・発展・作用・手法等諸要素に触れた文学論である。⁴⁶ 紀氏の議論から大津皇子が初めて詩賦を作ったという記述に二つの面を持つことが知られる。一つは大津皇子が最初に漢詩を作った起源論的意味と、もう一つは漢詩が和歌に影響を及ぼした経緯である。後者については枚数の関係で詳細は別の機会に譲る。前者は言い換えれば、つまり近江朝において大津皇子が最初に漢詩を作ったことに間違いはないかどうかである。この問題に関して古人の答えは疑いなく肯定的であった。

天智称制二年に生誕された皇子大津は天智八年に六歳、九年に七歳となる。初唐では四傑の一人、王勃が「六歳にして屬文を解し、構思すること滞り無く、詞情英邁なり」(旧唐書・文苑伝)といわれ、六歳で優れた詩文を作った。楊炯も幼くして「聰敏博學にして善く文を屬す」(旧唐書・文苑伝)ばかりでなく、六歳で神童に挙げられ校書郎という文官の役職まで授かったのである。また賈賓王も七歳で能く詩を賦した(唐才子伝)。つまり古人にあつて六、七歳で詩を作ったのは全く不思議ではないのである。

平安朝でも貴族の子弟で六七歳から作詩を習い始めた。いわゆる幼学四書の中で百詠は作詩の手引き書であるが、藤原誠信が七歳でこれを誦読した(文机談)。『源平盛衰記』に「小児共ノヨム百詠」とあるから、日本でも貴族子弟は唐人と同じく六七才から作詩を習い始めることが知られる。従い、古代の文人墨客からすれば七八歳で詩を作ったのはむしろ至極当然なことであつたといつてもよいであろう。

三、伝記の吟味

実は大津皇子が幼年より学を好み能く詩文を作ったことは、懷風藻詩人伝に明白に記述されている。

状貌魁梧にして器宇峻遠なり。幼年より学を好み、博覽して能く文を屬す。壯に及びて武を愛し、多力にして能く劍を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘れず、節を降して士を礼す。是れに由りて、人多く附託す。時に新羅の僧行心といふもの有り、天文卜筮を解す。皇子に詔げて曰く、「太子の骨法、是

れ人臣の相にあらず、此れを以ちて久しく下位に在らば、恐らくは身を全うせざらむ」といふ。因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を図る。ああ惜しきかな。かの良才を藎みて、忠孝を以ちて身を保たず、此の姦豎に近づきて、卒に戮辱を以ちて自ら終る。

ここに謀叛事件について詳しい経緯を記されているのみならず、皇子の才学に関する記述が注目される。「幼年から学問を好み、博学してよく詩文を作る」のは、「成長してから武芸を愛し、力強く剣術に優れる」ことに対置されているが、前者は天智朝、後者は天武朝の時代精神を反映しているといえよう。

懷風藻序に天智天皇の治世思想に触れて次のように記している。既にして以爲へらく。風を調へ俗を化するは、文より尚きこととはなく、徳潤ひ身を光らすことは、孰か學より先ならむと。ここに則ち庠序を建て、茂才を徴し、五禮を定め、百度を興す。憲章法則、規模弘遠なること、復古より以來、未だ有らざるなり。

風俗を改善し人民を教化するのに最も重要な「文」とは經典の文章、徳を養い身を立派にする「学」は儒学の經典を学び極める学問であった。これが儒教文化圏という伝統の文学の第一義であり、律令文物制度の基づく基本思想であったことは既に別稿で述べたことがある。⁴⁸ 幼い大津皇子が正にこの天智朝の時代精神を身をもって実践したからこそ殊に天皇の寵愛を受けたのではなかったか。言わば、天皇が母親を失った孫を寵愛されたのはあくまで私事であったが、時代精神を実践した天才少年だからこそ天皇の寵愛が公的性格を帯びて正史に記載されたのであろう。なお持統

紀に幼年の大津を「音辭俊朗」と記し、音声も言葉遣いも優れて朗らかなのも、日常会話ではなく、学問の談論や文章を朗詠する「音辭」であったに違いない。

一方、持統紀に「成長すると弁才に秀で才学に富み、尤も文章を好んだ」とある記述は、詩人伝の伝える「年長になると、武芸を愛し、力強く剣術に秀でる」というのと一見して齟齬するように見える。が仔細に吟味すると、詩人伝の記す「武を愛する」のは「武」を政治の要とする尚武精神の漲る天武朝に至って新たに成長した大津の一面であって、武も儒学「六義」に内包されたものである。それと同時に皇子が学を好むことは変らなかつたに違いない。だからこそ文武両道に傑出した「良才」に成長され、律令制度整備にあたって「始めて朝政を聴く」ことを許されたのであろう。

つまり、持統紀と詩人伝の記述に偏重はあるが、両者の相互補正により大津皇子の人間像は明確に浮かび上がってくる。文学詩賦に限って言えば、皇子は幼少の時から学問を好み能く詩文を作ったので、殊に外祖父天智天皇に寵愛された。従って近江朝に興った漢詩文は実際に幼時の大津皇子が契機を作ったとしても何ら不思議なことではない。そして成長してからも学問を好み、文学を最も愛したから、「詩賦は大津皇子より始まる」という記憶をますます不動なものにしたと思われる。

四、詩作の時期——春苑言宴

懷風藻に収められた大津皇子の作品は四首。「春苑言宴」「遊獵」と「述志」および「臨終」である。このうち、春苑言宴と遊獵は

五言八句からなる五言詩、皇子の学識、性格を示す代表作といつてよい。述志は七言二句の対句、臨終は五言絶句であった。

「春苑言宴」の制作背景を考えれば、天武十年二月に浄御原令制定の勅命、草壁皇子の立太子、そして同十二年二月に大津皇子が「始めて朝政を聴めす」といった記録が注目される。皇親政權を敷く天武朝において皇子の「朝政を聴く」ことは極めて重要な役職に就くことを意味するに違いない。おそらく律令の編纂に伴う朝廷儀礼の整備において豊富な漢学知識を必要とするため、博学で詩文を得意とする皇子の才能が見込まれたのであろう。饗宴がそうした儀礼制度を示す最も主要な場の一つであった。

春苑言宴

春苑ここに宴す

開衿臨靈沼、

衿を開きて靈沼に臨み、

遊目歩金苑。

目を遊ばせて金苑を歩む。

澄清苔水深、

澄清として苔水深く、

曖曖霞峰遠。

曖曖として霞峰遠し。

驚波共絃響、

驚波は絃とともに響き、

哢鳥與風聞。

哢鳥は風とともに聞ゆ。

群公倒載歸、

群公倒載して歸り、

彭澤宴誰論。

彭澤の宴を誰か論ぜん。

律令制下において時折り催される宮中の御宴が漢詩を作る場であったことは、懷風藻の序に述べられたとおりである。だが、「春苑言宴」は宮中の御宴で作られたものではない。「言」は語調を整える語で特に意味がなく、一首は春の庭園に集う宴を歌う作であった。

「衿を開く」は寛いだ気分を表す表現。「靈沼」は『詩經・大雅』

靈台に歌われた周の文王の御苑にある池、王の仁徳を象徴する景觀の一つ。「靈」は生き物が豊かに育つ意味で池を修飾する美称となる。「金苑」の金も美称だが、恐らくは石崇の別荘金谷園を準える優雅で豪華な庭園を表し、「靈沼」と対を為す。冒頭二句で寛いだ雰囲気豊かな山莊の春色を楽しむ様子を描き出している。「苔水」は澄みわたる池の水底に緑の藻や水草が生い繁る景色。「曖曖」は雲や霧の立ち込めるさま。「霞峰」は霞の掛かった山頂を表す。この第二聯は囑目の景色を述べるとしたら、当の宴は皇子の山莊で開かれたことになる。大津皇子と親友の川島皇子も五言絶句「山崩」で宴会と友情を歌っているから、恐らく同じ山莊での作であろう。

第三聯は一転して宴に演奏される楽曲を述べる。「驚波」は飛沫を揚げる荒波を表すが、庭園にある実景なら築山から流れ落ちる滝の勢いを描くであろう。と同時に、高山や流水の音色を音楽に模写した伯牙の弾く琴曲「高山流水」を指す。また「哢鳥」は囀る鳥、花木の生い茂る庭園に有り触れた光景だが、春の鳥は鶯、春鶯囀るは、唐の高宗皇帝が作ったという大曲「春鶯囀」の曲名を踏まえる。

そして尾聯の「倒載」は魏晋の間を代表する知識人、竹林七賢の一人・山濤の息子山簡（字は季倫）の故事による。西南の地方長官にあった山簡は風流淡泊で有能な役人だったが、乱世に遭って酒に酔うことで憂えを紛らすしかなく、日ごろ荊州豪族席家の庭園に出掛けてはへべれけに酔ってしまう彼を土地の子供は「日暮れて倒載に帰り、酩酊して知る所無し」（晋書・山簡伝）と歌ってからかった。また「彭澤」は彭澤県令を最後にすっかり田園に

引退した陶潜（字は淵明）の故事を用いる。陶淵明も無類の酒好きだが、彼には音楽の嗜みがなく、いつも弦のない琴を用意して、友人と酒盛りをやる時は琴を弾くふりをして、音が出なくとも琴の趣を知ればこと足りるといい、また自分が酔ったら相手に勝手に帰ってよいともいう（『晋書』陶潜伝）。つまり、尾聯は後世、飲酒の名人として名高い山簡と陶潜の故事を踏まえて、豪勢な庭園で開かれたこの春色麗しく詩酒を交えて音楽響く風流な宴会は、参加した客人が山季倫と同じように正体を無くすほど酔うがよいと勧める一方、田園に引退し琴を弾くふりをするだけの陶潜らの酒盛りが話にならない、と豪語したのである。ここに作者の豪快な性格が現れているばかりでなく、朝廷政治の中枢に居る執政者として、高潔な隱遁生活に徹した陶淵明よりも王朝に仕えた山簡を好む当然の立場でもあった。そこから作者が典拠に用いた故事に対する正確な認識を認めてよいであろう。「春苑言宴」は美辞麗藻を駆使した作詩技巧のみならず作者の豊かな学識と強い個性を表した佳作といつてよい。

なお、一首の韻字は「苑・遠・聞・論」で、広韻では転韻または通韻を用いるともいえるが、吳音で押韻している点で注目されてよいであろう。

五、遊獵

遊獵一首は題名こそ狩獵とあるが、内容は狩獵後の宴会詩である。詩酒音楽を遊び楽しむ春苑の宴会も当時私宴として豪勢に過ぎる嫌いがあったであろうが、それよりも皇子の豪放な性格を見せてくれるものはこの遊獵詩にほかならない。

遊獵

遊獵

朝擇三能士、
暮開萬騎筵。
嚙齏俱豁矣、
傾盞共陶然。
月弓輝谷裏、
雲旌張嶺前。
曦光已隱山、
壯士且留連。

朝に三能の士を擇び、
暮に万騎の筵を開く。
嚙を喫うてともに豁矣たり、
盞を傾けてともに陶然なり。
月弓 谷裏に輝き、
雲旌 嶺前に張る。
曦光已に山に隠り、
壯士且く留連せよ。

遊獵の詩は懷風藻中にこの一首しかない。この詩について「大津皇子の本領が遺憾なく發揮されている。『暮開萬騎筵』の句によつて、多くの士卒を養うて居られたことが察せられる。器宇峻遠にして武を好まれた性質は屢々この詩に見るごとき豪放な遊獵の催となつて發揮せられたのであらう」と評し、伝に絡んで解することが多い。その意味で皇子の代表作といつてよい。

首聯「三能の士」とは、射（弓矢）、御（馬車の制御）、角力（力技）の三つに優れる勇士の意。『礼記・月令』に孟冬の行事として「天子すなわち將帥に命じ、武を講じ、射・御・角力を習はしむ」と記している。それは仲冬の旧曆十一月に大規模な狩獵を行うために、三能の勇士を選抜して演習をするものであった。古代の狩獵儀礼は年に三回（夏・秋・冬・春は繁殖期のため行わず）行われる中で、冬十一月の狩獵が最も規模が大きく、王が自ら獵に出でますので、射・御・角力に優れる士を選んで一個月前から訓練を開始する。ために獵の收穫を祝う宴会もそれだけ規模が大きく、「萬騎」という概数も対偶表現として適切である。皇子の詠

んだ遊獵は恐らく私的な遊獵ではなからう。

頽聯の「鬪」は切肉、「豁矣」の「豁」はからっと開け広げた様、「矣」は判断や感動を表す助辞だが、「豁矣」は熟語としては稀に見るものである。また詩の対偶表現で助辞「矣」に対して感動を表す「哉」を使うのが普通、うっとり「陶」陶醉した様子を表す助辞「然」と対になる例が稀であり、ここに作者の非凡な表現力を見て取れるし、狩獵後の宴会の雰囲気を見事に表したばかりでなく作者の個性をよく現しているといえる。

第三聯は弓矢が谷間を埋め尽くして輝き、旌旗が嶺前一面を張り巡らす光景を描く叙景であるが、「月」と「弓」、「雲」と「旌」はそれぞれ一種の縁語表現であり、二句は極めて典麗な対句を成すものである。

そして尾聯の「曦光」は夜明けか夕暮れの薄光りを指すが、「留連」は立ち留まって遅々として帰らないことをいう。夕方から開かれる宴会は夜更けまで続き、客が酔って帰るのが儀礼だから、参会者に酔いを勧めるか、引き留めるのは宴会詩の常套ともいっても過言ではない。

したが、この詩に詠まれた遊獵を私的な遊興と考えるには躊躇が感じられる。古代社会において狩獵は大事な経済手段であったばかりでなく、軍事演習の性格を帯びるので重要な儀礼でもあった。狩獵の獲物はまず神祇・祖霊に供え、次に賓客をもてなし、その次に王の厨房に充てられる（礼記・王制）。律令制下では天皇、皇太子、諸王及び群臣総出の狩獵行事の記載が史書に夥しい。この遊獵詩は豪勢な飲み食いぶりを描いているが、弓矢、騎馬、体力に優れる三能の士を選抜しての狩獵なので、やはり公

的行事が詩の制作の場ではなかったかと思われる。

懷風藻に遊獵詩はこの一首しかないが、万葉集に収められた遊獵の歌は少なしとしない。宇智野に遊獵の時、中皇命に命じられて間人連老が舒明天皇に莊重な儀礼歌を献上している。

やすみしし わご大君の 朝には とり撫でたまひ 夕には
い寄り立たしし 御執らしの 梓の弓の 金弭の 音すなり
朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今立たすらし 御執らし
梓の弓の 金弭の 音すなり（1・三）

たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野
（反歌・1・四）

長歌のゆつたりとした嚴かな格調から狩獵の儀礼的性格が一読して明白であろう。大津皇子の遊獵詩は宴会歌だからそれほど莊重な格調を持ち得ないが、同じく狩獵後の宴会歌としては、天智天皇が蒲生野に遊獵される時、額田王と大海人皇子の間に交わされた応答歌が名高い。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（1・二〇）

紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも
（1・二二）

左注によれば、これは天智七年夏五月五日、天皇が大皇弟・諸王・内臣及び群臣を悉く従えて行われた狩獵の時の作であり、一見して恋に絡む相聞歌とも見えるが立派な狩獵後の宴会歌であった。従い、皇子の遊獵詩も公的行事を制作の場として作られたと考えても不思議はないはずである。

そこで注目すべきなのは、作者が「春苑言宴」においても「遊

「獵」においても主催者として言挙げの姿勢である。それに天武十二年二月以降、「朝政を聴く」皇子大津の立場と合い重なることは固よりであろう。そして詩表現に用いられた故事・典拠を見れば、作者の豊かな学識才能がその役割を果たすのに足りることは一読して明らかである。

六、「述志」は幼時の習作

「述志」と題する大津皇子の作品は七言二句しかない。それに「後人聯句」とある二句を後に付けて掲げられている。

述志

志を述ぶ

天紙風筆畫雲鶴、
山機霜杼織葉錦。

後人聯句

赤雀含書時不至、
潜龍勿用未安寢。

聯句という複数の作者による共作の形式は漢武帝の栢梁臺詩に始まるといわれる。漢の孝武帝が群臣を宮中の栢梁臺に詔して七言詩を一句ずつ作らせたなら、群臣はそれぞれ自らの役職に関連して七言一句で抱負を述べたものである。なので、七言聯句は始めから志を述べるものであったといってもさしつかえない。後に栢梁臺と称せられる七言聯句は形式的にも内容上でも漢武帝の栢梁臺詩を踏襲するものが多い。七言二句一韻ずつの聯句も北魏孝文帝「縣弧方丈竹堂聯句」などのように少なしとしない。しかし大津皇子の述志二句に付けた後人聯句は皇子と同時の作ではなく、後人が皇子の悲劇を詠んだ二句を付け加えて聯句の形に仕立てた

ものだから、厳密な意味での聯句ではないといつてよい。

それでは「述志」七言二句はどういう性格の作品なのか？結論を先に言えば、これは七言対句の習作であり、優れた秀句ではあるが、完成した詩作ではない。確かに古樂府詩に七言二句の様式は存在した。例えば「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」という三峽歌が名高い。しかし、一首となるには「押韻」が必要であり、「述志」二句にそれが見当たらない。

いったい詩賦の制作を学ぶには先ず対句作りから習い始める。初唐に流行した詩学書『文筆式』属対に次のように記述している。

第一に的名対。的名対は正なり。おおよそ文章を作るは、正相対する。上句に「天」を安き、下句に「地」を安く。上句に「山」を安き、下句に「谷」を安く。上句に「東」を安き、下句に「西」安く。…この類の如きは、名づけて的名対と為す。初め学びて文章を作るは、須くこの対を作り、然る後、余の対を学ぶべきなり。

詩作りは対偶表現から始まるが、その第一に「天」「地」のように厳密に対偶する名詞を上下の詩句に配置する的名対が挙げられる。的名対は正対ともいい、後者の場合、名詞に限らず「白・黒」「去・来」のように用言も含まれる。これをさらに推し広げると異類対になる。

第六に、異類対。異類対は上句に「天」を安き、下句に「山」を安く。上句に「雲」を安き、下句に「微」を安く。上句に「鳥」を安き、下句に「花」を安く。上句に「風」を安き、下句に「樹」を安く。この類の如きは、名づけて異類対と為す。これ的名対に非ず、異同を比類す。故に異類対と言ふ。

但この対の如きを解するは、並てこれ大才なり。天地を籠羅して、文章卓秀たり。才に擁滞無く、多少を問はず、作る所篇を成す。但この対の如きは、詩に益し功有り。

詩に曰く「天清く白雲の外、山峻く紫微の中。鳥飛びて去る影に随ひ、花落ちて揺るる風を逐ふ。」

少々長い引用であるが、右の異類対は当代を風靡した上官儀『筆札華梁』をはじめ、初唐以前の詩学書に等しく見られるところである。異類対は対偶となる名詞の部類を大きく広げたばかりでなく、形容詞・動詞の類も対象に包含する。そして、このような対句を作るものは「大才」と称賛され、自らの才能を縦横無礙に發揮し、天地万物を網羅して優れた詩文に仕上げることができるという。

振り返って大津皇子の述志二句を見れば、二句は完璧にこの異類対に符合していることが知られる。異類対の例詩と比較してみれば、かたや詩語遣いの婉曲巧妙さにおいて五言の精妙を尽くしたのに対して、異類に属する対偶表現で描き出す景色の雄大多彩さにおいて七言の長所を余すところなく發揮したといえる。

詩学書は一種の幼学書であり、幼時から文学を好む皇子が初唐の詩学書に触れた可能性は大いに有り得る。その詩作の手法と評價の基準に従えば幼い皇子の卓越な才能が一層際立ったものではなかったか。いうならば七言対句の「天紙」「風筆」「雲鶴」と「山機」「霜杼」「葉錦」はすべて異類対をなすばかりでなく、内容上、風を受けて白雲が青空に浮かび飛ぶ光景を背景にして、錦のように色彩絢爛たる紅葉に染まる秋山の景色をものの見事に描き出しているのである。天智天皇の「文学」の思想に基づき新しい文物

諸制度が急ピッチに整備されている最中、今だ漢詩文が作られていなかった時に、幼年の皇子大津が「大才」の証と称される異類対で織り成した、五言よりも一層新味に富む七言対句で雄大かつ絢爛たる自然美を巧みに描き出したなら、囲りからどんなに驚嘆と称賛を受け、ひいては人々の追従の契機を作ったのか、想像に難くないであろう。ために「音辞俊朗」という爽やかな姿で学問に熱意を燃やした幼年の皇子大津が「天智天皇に愛され」たに違いない。また、この秀句は後世に長く伝えられ、東大寺諷誦文に「霜杼織葉錦時」と記し、弘法大師「遠江浜名淡海図」に「天紙風筆画雲鶴、山機霜杼織葉錦」と讃えられ、詩賦の興りは大津皇子に始まる」という持統紀の記述をますます深く人々に印象付けたのではなかったか。

大津皇子の文学制作は漢詩に留まらず、和歌にも及んでいる。万葉集卷八に見える大津皇子の秋歌

経もなく緯も定めず少女らが織れる黄葉に霜な降りそね
(8・一五二二)

右は「述志」第二句に詠まれた光景や趣旨とほとんど同じこと一見して明かである。古今集序に「大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人・才子、風を慕ひ塵に継ぎ、かの漢家の字を移して、我が日域の俗を化す」という紀淑望の論述のなかに、皇子が漢詩と共に和歌を作っている事実も当然考慮にあったであろう。

それはともかく、幼時の習作と見られる「述志」七言対句の存在により、「詩賦の興りは大津皇子より始れり」という史書の記載が裏付けられたことは重要であり、それが和歌の世界はどんな影響を及したかを考えるのは別の機会に譲りたい。

七、臨終の作

朱鳥元年（六八六）九月九日、天武天皇が崩御、皇后が臨朝称制する。十月二日に皇子大津の謀反が発覚、皇子が逮捕され、訳語田の家で死を賜った。その時に皇子は五言絶句の臨終詩一首を作り遺している。

臨終

臨終

金鳥臨西舍、

金鳥^{きんう} 西舍^{せいしや}に臨み、

鼓聲催短命。

鼓聲^{こせい} 短命^{たんめい}を催す。

泉路無賓主、

泉路^{せんろ}には賓主^{ひんしゅ}無く、

此夕誰家向。

この夕^{ゆう}、誰^たが家^かに向^{むか}はん。

臨終の時に及んでなおも詩を作ったのは正に「最も文筆を愛した」証にほかならないが、この詩に関して皇子の実作か仮託かに絡んで三つの問題が提起されている。

一つは類詩の存在とそれぞれの相関関係である。¹¹⁾

1 江為「臨刑詩」（『全唐詩』巻741）

衝鼓侵人急、西傾日欲斜。黄泉無旅店、今夜宿誰家。

2 陳後主臨行詩（智光『浄名玄論略述』『日本大藏經』方等部章疏5750頃）

鼓声催命役、日光向西斜。黄泉無客主、今夜向誰家。

右1の江為は五代の人、大津皇子よりもずっと後の作であったうえ、その「臨刑詩」に「旅店」という別の類型表現が入り混んだため、皇子の臨終詩と直接な影響関係が認め難い。詩中「旅店」とは「逆旅」と同義で人生・生命を比喻する。蕭統・陶淵明集序に「百齡の内に処し、一世の中に居るは、倏忽たること之れを白

駒に比ひ、寄遇すること之れを逆旅と謂ふ」とある「逆旅」いがそれである。陶淵明が臨終直前に書いた自祭文に「陶子、將に逆旅の館を辭し、永に本宅に歸せん」といい、人生を営む自宅を「逆旅の館」と表現した。

対して、智光『浄名玄論略述』（750頃成立）に引かれた伝陳後主詩が大津詩との類似は一見して明白である。しかし、このことは大津詩が後人の仮託という推測の根拠にならない。陳後主に関わる伝説は確かに既に指摘されたとおり、智光の師、呉の地に留学した智蔵が日本に伝来したものと思われる。しかし、智蔵法師は筆者が別稿で述べたように、天武元年に帰朝し翌年僧正に任命されている。¹²⁾ それに懷風藻に見えるその「玩花鶯」一首は實際宴会詩であり、天武朝の詩壇が大津皇子を中心に展開されたことを考えれば、両者に直接な交流があった確率は極めて高い。つまり、皇子大津は智蔵法師との交流の中で南朝文化に親しみその影響を受けたと考えられるので、伝陳後主詩との類似はそれが皇子の実作の証とはなっても仮託の証にはならないのである。

二つは、臨終詩の系譜と詩表現の問題である。そもそも臨終詩の源流は挽歌に遡る。晋・干寶『搜神記』によれば、漢の挽歌は薤露と蒿里の二章あり、元は齊王・田横の門人が主君の自殺を傷しむために作ったものであった。漢の武帝の時、音楽家の李延年がそれを二曲に分け、「薤露」を王公貴人の挽歌、「蒿里」は士大夫や庶人の挽歌としたと言われる（崔豹・古今注も同じ）。

田横の故事は史記本伝に詳しい。秦末戦乱の時故地齊の士民に推されて齊王となった田横兄弟が漢軍に敗れて海島に逃げ込んだが、天下を制した高祖劉邦が田氏の人気を恐れて、京に上って臣

従するか攻め滅されるかの選択を迫る。やむなく二人の食客をつれて上京した田横が都の近郊に至って自刎し自らの生首を従者に御前に出頭させた。驚いた高祖が彼の賢明を褒め王者として礼葬し、従者の食客二人を將軍に拔擢したが、葬式が終わるや二人の食客が田横墳墓の横で自害し、海島に留めて来た勇士五百人も田横の自殺を知ると全員自殺した。ゆえに田横が「能く士を得た」といわれたのである。大津皇子も「節を降して土に接」し大勢の人心を得たものであり、田横の故事を熟知していたことはいまでもない。

挽歌や田横の故事を陳後主らも知っていたことはもとよりである。臨行詩は陳都陥落後捕まった亡国の君臣が隋都に連行された時の作とされるが、長安に着いて隋帝の前に引き出された彼らは罪に服して処刑されるしかないと思われたのであろう。後主が日頃江總、孔範ら近臣を重用し「狎客」と称して宮中に招き入れ、妃嬪達を交えて夕な朝な詩酒宴遊に耽け、政を乱し民を苦しめたため陳朝が滅亡したからである。つまり田横「主・客」と異なる意味で陳後主君臣も「主・客」であった。そこに「客主」の意味があったのである。

さて前記挽歌二曲のうち、「薤露」は乾き易い朝露が人生の儚さの喩えとして後世の詩歌に大きな影響を及ぼしたものの、当面の臨終詩と直接な関係は認められない。対して「蒿里」一曲が伝陳後主詩や大津詩の語句表現に色濃く影を落としその典拠となっている。

蒿里

蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚。鬼伯一何相催促、人命不得少

跼蹐

蒿里は誰が家の地ぞ？魂魄を聚斂して賢愚無し。鬼伯一に何ぞ相催促せんや、人命少しも跼蹐を得ざる。

詩中「鼓声」が「鬼伯」に代わって「短命」を催促するが、「無客主」も「無賓主」も「無賢愚」の言い換えにほかならない。また「誰家」とは字面通り「誰の家」の意ではなく、「蒿里誰家地」が典拠となって「蒿里」すなわち墓場の意味であったのである。従って、伝陳後主詩に「黄泉」と「誰家」とは異なる表現の同義語であり、また「泉路」も字面通り黄泉に向う道中を表すところに「鬼伯」に催促されて人命が少しも「跼蹐」が得られないという動的な過程を包含するが、その向かう「誰家」が墓場であったことに変わりはない。要するに、大津皇子が臨終という切羽詰った時に及んで、伝陳後主詩を思い出しつつ、詩語に工夫を凝らして「臨終」一首を詠んだのは、陳詩の典拠に挽歌「蒿里」と田横の故事があったからにはかならず、その「賓主」も「客主」と語意は同じでもそれぞれの指すところは自ずと異なるものである。この点、後で触れる同時の作である和歌からも一斑が伺い知られる。

三つに皇子の臨終詩の押韻の問題である。臨終詩は押韻をしていないとされ、それも「尤愛文筆」といわれる皇子の詩としては偽作と疑われる一因となったように思われる。確かに切韻や広韻によればこの詩は押韻しないが、呉音では「命」は「ミヤウ」「向」は「キャウ」であったから、初期漢詩は日本漢字音で韻を踏むものではなかったかとも推測されてしかるべきであろう。¹¹⁾

といった中国の詩韻学は魏の李登が『声類』を編集してから西

晋の呂靜、南朝の周顒、沈約らが多くの韻書を著した。隋の陸法言等が『切韻』五卷を作った理由は当時世に行われた六家の韻書が互いに異同することにあり、その根底に南北語音の相違や掃討した典籍の多寡があったことはいまでもない。『切韻』が唐代の官定韻書となつてからこれら古韻書が悉く散逸されたが、なかでも南朝の韻書が南方仏教に伴つて日本に伝わった確率は大きい。現に『文鏡秘府論』に沈約らの四声説が引かれたのがその一例である。

唐代に『切韻』を補充する著書も多く現れたがその殆どが伝わっていない。現存する古韻を補足する最初の著書は「博學好古」の宋儒呉棫が「經傳子史」を采輯して詩韻を分析し古詩韻を補足した『韻補』五卷である。その巻四「四十一漾」に「命、眉旺切。天命なり」と記し、例詩として郭璞「不死国讚」を挙げている。

有人爰処、員丘之上。赤泉駐年、神木養命。

人有りここに処す、員丘の上。赤泉年を駐め、神木命を養ふ。

『切韻』を継いで広げた『広韻』四十一様に「向、人の姓。又許亮切」とある。「命・向」が魏晉古韻では同じ韻部にあったことは間違いない。¹⁵⁾

してみれば、皇子の臨終詩は伝陳后主詩を想到したことは確かだが、臨終詩の系譜は挽歌に繋がり、その源流は田横故事に由来する挽歌の薤露・蒿里に遡るという知識があったこそ、工夫を凝らした一首を詠んだのではなかったか。そこに「節を降して士に接し」「尤も文章を愛」した者の姿・魂を見ることができるといって過言ではなからう。

八、結びに

大津皇子は、容姿・体格とも立派であるばかりでなく、学問を好むその音声も言葉遣いも爽やかで優れるため、天智天皇に愛されてきた。成長すると弁知に秀で才学に富み、尤も文筆を好んだ。詩賦の興りは近江朝において大津皇子より始まったのである。持統紀の皇子大津に関わる記述を懷風藻の詩人伝と読み合せれば、このような日本漢詩文勃興の経緯が読み取れる。このことはまた現存する皇子大津の漢詩作品を分析することによつても裏付けられる。

書紀の講伝が繰り返され、詩賦制作や文学論議が盛んになるにつれ、詩賦の興りは大津より始まるという認識がますます浸透したばかりでなく、その詩賦が和歌に投影するところが大きかったことも認識されるようになったのであろう。紀淑望が古今集真名序に記した。

大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人・才子、風を慕ひ塵に継ぎ、かの漢家の字を移して、我が日域の俗を化す。民業一たび改りて、和歌漸く衰へぬ。

かくある論述は大津皇子が初めて詩賦を作ったのみならず、その詩賦が和歌への影響を及ぼしたことに中心があったように思われる。万葉集に収められた大津皇子の和歌で漢詩との関わりが見られるのは先述した対句「述志」と秋歌のほか、臨終詩と同じ日に詠んだ和歌も万葉集に見え、皇子の詩魂が伺えるのである。

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

(3・四一六)

題詞によれば、大津皇子が死を賜った時、磐余の池の畔で涙を流して作ったという。歌はその日の囑目した光景を言葉に捉えつつ、今日かぎりでこの世を去るのだな、という悲しい気持ちを歌っている。「磐余の池」は王朝発祥地の象徴であって、かつて宮内か宮の近くにあったらしい¹⁶。そこで目に映った「鳴く鴨」を特に取り上げたのは恐らく単なる囑目の光景ではなく、なんらかの寓意があつたのではなかったか。和歌の先蹤表現は「鴨」に限らず大津以前に少ない。詩賦なら「鳧・鴨」のイメージから二つの比喩が挙げられる。一つは宋玉・九辯に「鳧雁皆それ梁藻を啖ふ」といい、王逸注はこれを「群小の位に在り重禄を食う」ことの比喩と解釈した。以降「鳧藻」は食に有り付く者の欣喜雀躍の姿を現す熟語となった。今一つは李陵が蘇武と別れる贈答詩に歌った惜別の情である。二人の故事は史記の伝記に詳しいが、それに擬えた別離贈答詩が文選に見え、その発展した形は歐陽詢撰『藝文類聚』人部・別に見える。

雙鳧俱に北に飛び、一鳧独り南に翔く。子當にかの館に留り、我當に故郷に帰る。

鳧は群を成す渡り鳥であることから、遠い北方に遊牧する匈奴に拘留された孤独な二人が互いに親友と認め自らを「雙鳧」に喩えたが、漢と匈奴の関係回復により外交使節の蘇武が王朝に迎え帰られるのに、反逆罪を問われた李陵が独り匈奴に留まるしかなかった。別れる際交わされた二人の別離贈答詩は五言詩の濫觴とされた。つまり詩賦の世界では「鳧」は「小人」とも「名臣」とも譬えられるが、それらを自家葉箋中に収めた作者が「磐余の池に鳴く鴨」と歌った時、胸中に何を思い浮かべたのであろうか。

大津皇子も「節を降して士を礼」したので、彼に「附託する」士人が多く、彼らも王朝に仕える大宮人だから、「磐余の池に鳴く鴨」と表現されてしかるべき存在である。ここに臨終の詩にも通じる同様の心境が読み取れるであろう。

持統紀に「尤も文筆を愛みたまふ」という皇子の愛した文筆はやはり単に「詩賦」を指すのではなく、和歌もその愛してやまない素晴らしい文学なのであつた。

注

- *1 『純日本紀』元正四年六月、「皇太子始聽朝政焉。」
- *2 多田一臣「大津皇子物語をめぐって」(『古代国家の文学』弥生書店、昭和六三年一月)、品田悦一「大津皇子・大伯皇女の歌」(神野志隆光、坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品・第一巻・初期万葉の歌人たち』(和泉書房、一九九九年)
- *3 岡田正之『近江奈良朝の漢文学』(吉川弘文館、増訂版一九五四、一一二)、小島憲之「懷風藻の詩」(『上代日本文学与中国文学下』塙書房、昭和三十七年九月)
- *4 拙稿「遣唐大使多治比広成の述懐詩」(王勇編『東亜視域と遣隋唐使』光明日報出版社、平成22年6月)
- *5 中西進「詩人・文人」『万葉集の比較文学的研究』(南雲堂校楓社、昭和三十八年一月)
- *6 拙稿「古今集両序与中国詩文論」(林秀清編『現代意識与民族文化——比較文学研究文集』復旦大学出版社、昭和61年11月)
- *7 拙稿「李嶠百詠」序説——その性格・評価と受容をめぐって——(『和漢比較文学』第三十二号、平成十六年二月)
- *8 拙稿「近江朝漢詩文の思想理念」(『埼玉学園大学紀要・人間学部編』

第十一号」平成二十三年十二月）

*9 杉本行夫注釈『懷風藻』（弘文堂書房、昭和十八年三月）、林古溪『懷風藻新註』（明治書院、昭和三十三年十一月）など

*10 例えは、陸士衡・長歌行に「逝矣經天日、悲哉帶地川。」謝玄暉・晚登三山還望京邑に「去矣方滯淫、懷哉罷歡宴。」太宗皇帝・元日に「穆矣熏風茂、康哉帝道昌。」

*11 小島憲之「懷風藻の詩」（『上代日本文学与中国文学下』塙書房、昭和三十七年九月）

*12 金文京（臨刑詩の系譜―黄泉の宿―『興膳宏教授退官記念中国学論集』（汲古書院2000）、「大津皇子（臨終一絶）と陳後主（臨行詩）」『東方学報』京都第七三冊（京都大学人文科学研究所2001）

*13 拙稿「釈智蔵の詩と老莊思想」（『埼玉学園大学紀要・人間学部編・第十号』平成二十二年十二月）

*14 王少光「懷風藻と中国の詩律学」（辰巳正明編『懷風藻―漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院、平成十二年十一月）、半谷芳文『懷風藻』押韻考―六朝韻部の分類・『切韻』及び日本漢字音から考察する日本漢詩生成期の押韻―」（『和漢比較文学』第四十九号、平成二十四年八月）

*15 明・楊慎撰『古音叢目』卷四「二十三漾」に「向」「命」が均しく見える。
 *16 上野誠「賜死・大津皇子の歌と詩―磐余池候補地の発掘に寄せて―」（季刊『明日香風』第123号）

大津皇子の詩と歌

A Study of the Poems by Otsu-no-miko

HU, Zhiang

キーワード：大津皇子、漢詩、和歌

Key words : OTUNOMIKO, chinesepoems, japanesepoems